

歐米人の眞宗觀と「眞宗佛教研究」の出版

藤井 周慶

自分は佐々木月樵氏の近著“A Study of Shin-Buddhism”を読んで頗る感動させられた一人である。そして今覺束ない筆の運びもてその一端を紹介したいと思ふてゐる。深く宗學そのものを研究する機會が與へられぬ自分は内容上よりも寧ろ如何に本書が歐米佛教界に重要な位置を占めてゐるかを叙述するに止めてなかう。

眞宗の聖典教義そして歴史の歐米に紹介されたものも少なからず見受けらるゝ。しかし一向にその反響もなく、ある數種の好事家を除いては、眞摯な信念の所有者が彼地に生れ出ないのはそも何故であらうか。

私は今多數の人々が持つてゐる彼眞宗觀なるものを理解しその上にその民性嗜好環境のすべてを照察した後での宣敎でなければ、蓋し熱湯に注ぐ雪片程も効果はないことと思ふ。實際自ら酒に陶醉せる人がその忘れ難い旨さを鼓吹すること如何に切であつても、下戸には何の感動もない如く、如何なる廣長舌を以て高妙な純理を宣傳しても、すべてに於て我々異つた見地に立てるものにはその魂の核心に觸るゝことはあり得

べき筈もない。特に自負心の強い歐米人のこゝ故己が趣向によく適はなければ一度の首肯すら容易にするものでなく、今までなされた先輩努力の跡は、つれなくも彼等佛教史研究の祭壇に糧として供せられあはれ、宗教家が比較して以て己が基督教を我れに冠たらしむる教判的犠牲に用ひられたに過ぎないのである。これ畢竟所謂衆生樂欲悉檀、對治悉檀を忘れた我等の落度でなくて何であらう。

かの日本にゼスウィット門派を始めて傳へた聖僧フランシスコザウキエルが人々を集め、天界と地獄の二圖を並べて切支丹信否の效過を説いてゐた時、聽衆の一人が進み出て問ふた。「畏くも皇宗を初め奉り、我が祖先は何處に今在るや。」聖僧は答へた。「デウスを知らざりしものは皆地獄。」と。これを聞いた人々は苟くも祖先にして獄苦を受け給はゞて誰もバフチゾウを受けようとしなかつたが、僧はこの時、その麗はしき民情に感嘆し、此地への布敎は全然他所その手段を異にせなければならぬを法皇に獻言してゐる。自分も文書

なり、講演なり、眞宗を外國に宣揚せんことを人に少くもこうした充分な察機の状態があらんことを切望する。

さてしからば彼等は如何なる淨土教觀を持つてゐるだらうか。直接彼等に接せない自分には判らぬが、纔かに手元にある書籍を通してその一端を伺うこととする。勿論洽なく諸文献を涉獵した上の考察は他日専門研究の手に依らなければならぬであらう。

(A) 歴史的な考へ方。

名にし負ふラインの大流も若し之れを溯江すれば、けにス井ス山中の潺々なる一溪泉に過ぎぬ如く、淨土の教へも史的逆溯を試るとき、彼等史家は始んてその起源そのものゝ問題に於てつれなくも之れを見縊つてしまふ。と言ふのは史的意味に於て淨土教は釋尊以上に上ることは出来ないが、かゝる他力救済の宗教を以て歐米の人々がバリー原典より忠實に還元し得た「喬答摩の宗教」そのものの間に相容れざる矛盾を感じてゐる。そして此等をば曾て我々祖先の試みた五時八教でふ平面的見方を離れ、これを釋尊その人の宗教分野から蹴落してしまつた。かくてこの思想の發祥を以て紀元前二世紀に溯るべからずとし、こゝに種々

な起源説を推測してゐる。この最なるを概括すれば

a、セミチック文明の影響をみる見方。

東洋思想は神人冥合なのに淨土教の他力救済は寧ろセミチック風の考へ方であるこの漠然なる據の上に、之れをシリア宗教の影響とする。Neander 氏などがそれだ(*Church history*, Vol. I, p. 114)。

b、名稱的類同による見方。

外國にも木村鷹太郎氏式の人があつて、ずつこ以前アガサルキデスに云ふ地理學者が *De Mari Erythraeo* の百二章 …… *at ispa beatarum insularum denominatio ad hodie num ducti Socotora inslan, quam veteres geographi discorde inuslan vocare Salent, hoc enim nomen natum est ex Indico dupa Suklatara* と言つたのを根據として、このスコトラは印度語スコタラスクハトハローラスクハブテイの突飛な推定を試み、*Transactions of the Oriental Congress*; vi. p. 100 に *Golemsi Efi* 云ふ人が種々の文献からの説を復活させてゐる。

c、印度宗教の影響をみる見方。

或は淨土は北クルに對して印度人の抱ける憧憬の轉化なり(泉氏佛教極樂論參照)とし、或はヴィシコヌ等大

自在派の影響を見る。ケルン、セナール、リス・デヴィツ等はこれに傾く。

d、波斯起源に對する學說。

これは當てアィテルが Handbook of Chinese Buddhism に疑つて以來可なり學界に用ひられてゐるようである。最近レヴ井氏やブーサン氏までこの傾向あるには聊か失望せられる。レヴ井氏は云ふ、「淨土教は予の考へを以てすれば西紀第二世紀を上る少し前、阿育王以後、かのベルシャ太陽思想系に印度文化交參の地——最初支那へ淨經を傳譯した安世高の生地バルチャよりオクザス河を経て、廣くこもガンドハールに互る範域を以てその搖籃の處とすべく、且つ予は思想的に文獻的に之が比較論定する爲には幾多の資料を提示し得べし」その意氣や當るべからざるものがある。今此等を一々批判する必要もないが、要するに歐米人は一般宗教史的立場から外的考證を進めてゐるが、まだこれを根本佛教そのものに求める内的な行き方や、椎尾博士なごのような般若を中心とした高級な研究過程には進んでをらぬ。だが是等の四面楚歌の史學界へ直入的に「一尊一教」の説明を持入つた所で何の役にも立つまい。

(B) 思想的な見方。

また他方眞宗教理の誤られた見方がある。それは恐らく多田鼎氏の書を英譯したアーサー・ロイドに在ると思ふ。即ち絶對他方の救済はキリスト教的へ考へられ「佛を父とし、衆生を子として救済は子の罪に對する父なる彌陀の赦しに在る」と言つたのが彼地でさまざまに採色せられて行つたものである。ハンス・ハーゼの「阿彌陀佛陀」にふ獨逸書にも之れを承け傳へ、先年日本に來たウィツテナごもこうした謬見を持つてゐるに聞く。こう見れば淨土教なきは全く佛教としての本質を失ひ、彼等の眼に「佛教の假面を蒙れる基督教」である如く映するものも無理からぬことである。

要するに以上の諸説は或は我々宗學者には一邊の嘲笑を以て捨てらるゝ憶説であるかも知れぬが、顧みて思ふに我等が據つた五時八教の金城はもろくも破れ、隨自意説法出世本懷の魔幻に酔ふた夢はあはくも醒めた今日、傳統教學の囿から脱して、一度びは親鸞その人に更らに釋尊そのものに立ち歸つて行くことであらう。そして、その “Buddha rose against the Brahmic teachings that sought Got outside and worshipped and prayed to him as being wholly external to oneself”

なるに氣付き、その當時の龜毛兔角な煩鎖な哲學に對して如實に正道を歩む實踐躬行の倫理的宗教の創造者なるを識知する。こゝに他力救済の淨土教との間に超え難い限界が作られてゐるを感じずにはをられない。

若しこれを以て彼れの内的發展とするも a は A となり A' A'' はなるが決して B を生むことはなく、寧ろ今日の奇怪なる棒兩喝雷を抜きにした佛心宗への過程を取るか、或は理智的に華嚴維摩へ展開して行くか、それとも大聖に對する遺弟の念力は凝りて法華壽量品の生命内容を依續するか——これ等が公正にしてまた純なる思想的必然ではなからうか。こうした淨教を異分子の潮流に置く考へ方は日本に於てすらも亦思想形式そのものを主とする研究者の一般を支配してゐるのは争はれぬ事實である。況んや外面的科學的な考察を試み勝ちな泰西學者に於てをやである。だから、彼等がこの根本誤謬を執してゐる間は永久に淨土眞宗をば正觀し得ざるべく、この泥みから彼等を脱いてやらなければ畢竟聖典の譯も教義の紹介も全く徒勞に歸すであらう。

顧つて今佐々木先生の近著 A study of Shin Buddhism を披くに、最もよくこの點に着眼せられてゐる。

歐米人の眞宗觀と「眞宗佛教研究」の出版について

先づ本書は全然從來の型を破り、第一章には「如何にして眞宗は佛教にて有り得るや」を論定してゐる。單なる自覺教それは宗教として成立し得ないと共に、自證を抜きにした救済が眞佛教に有り得よう筈もない。若し我々があくまで自淨其意の佛陀根本精神を離れての救済教を叫び、既に客觀的大自在神としての佛を豫想して考へるならばそれが宗教的價値は兎に角、到底釋尊の佛教とは言へぬであらう。釋尊の教へは決して形而上學的實在や獨一超在神を以てその起點とするのではなく全く無我の自覺にある。そして「釋尊と淨土教」それはこの無我そのものの、内容が釋明さるゝ處に自らの聯絡が證成されてゆくのである。

抑々釋尊は從來のアートマンに對して無我教を樹立された。しかし無我とは對有我的の相待の世界ではなく、實に古來解かんとして解く能はざりしアートマンそのものの、内容を完全に説明された者なのである。こゝに消極的な無我觀は一掃されて貴い價値も大きな内容を持つてゐることが知られ、自證教も救済教もみな融然としてこの原理に統攝され得る。實に我が眞宗の哲學的基礎も亦寧ろこの處に求むべきであらう。こゝから第二章以下の展開となる。既に他と見地を

異にしてゐる以上、從來の傳統ドクマは悉く打ち破られてしまつてゐる。就中、廻向を力説せらるゝ所は最もよく眞宗に對するハンス・ハーゼ者流の謬見を正す

ここが出来ると思ふ。

遮莫本書の如きは外的には今まで歐米人の腦にこびり付いてゐた疑網を跡方もなく摧いて彼等が心から我が教へに親んでくる機會を與へ、內的には佛教研究の上に新しきエポック、メーキングを作り得たことに於て恒久的な價值を持つてゐると思ふ。そして曾てレヴ井氏が「淨土教を以てベルシャ思想に擬せん」とした「こ」を憶ひ出し、恐らくこの年末には本書を手にする「こ」故新しい春が訪れる「こ」、之を披いた氏がどんな感起すだらう——恐らく非佛教説を徹回して呉れるだらう「こ」を想念しつゝ、私は心からの歡びを禁める「こ」は出来ないのである。

最後に本書の述作を以て之れを基督教々學界に於けるハルナツクの勳績に比するものである。

(本稿は一夜早卒の間にものせしもの故頗る杜撰なもので精確な考查は他日を期することする。)

新刊紹介

宗教哲學概論

帆足理一郎著

人間のたましひに深くねざしかくて人間「こ」も永遠なものゝ宗教でなくして何であらう。けに宗教の世界こそたましひの遊ぶ世界である。故に殉教者の歴史は古く、且つ人間「こ」共に宗教「こ」共に永遠なのである。此森嚴なるそして懐かしい宗教の體驗——歴史的にも或は人間的にも——に對して知性の光をなげかける努力こそそれは宗教に關する學問の生誕である。學問においていろ／＼の立場が存立する如く從つて宗教に對する學問にも亦いろ／＼に成立する根基があるであらう。このものゝ一つに哲學の歴史の如く古い宗教哲學が存する。宗教哲學「こ」は何であるか、古今三千年、東西兩洋ひろく論ぜられ研究され乍ら自然科學が明な道を發見して進むやうには進むべき道が示されて居らない様である。カントに依つてやゝ暗示せしめられたやうながらまだその本道に進み出て居る「こ」は思はれない。斯る廣漠なる宗教哲學の學問界にそして我邦の學界に